

登場人物

- ・光源氏・・・物語の主人公。
- ・空蟬・・・伊予介の妻。紀伊守・軒端萩の義母。
- ・小君・・・空蟬の弟。
- ・紀伊守・・・空蟬の義理の息子。
- ・軒端萩・・・空蟬の義理の娘。
- ・民部のおもと・・・侍女。背が高く笑われています
- ・桐壺更衣・・・光源氏の亡くなった母。二条院は更衣がいた家です。

[27・オ]

【翻字本文】

空蟬 [割・並 源十六才 以歌ノ名也]

源はねられ給はず、小君も涙をこぼしてふしたり。

夜ふかく出給ふ。其後、御せうそこもたえてなし。かく

【現代語訳】

空蟬 [前の巻と関係する巻です。〈光源氏〉が十六歳の時の話です。この巻の名前は歌の中の言葉からつけられました]

〈光源氏〉は〈空蟬〉のことを考えて寝ることができず、〈小君〉も泣きながら横になっています。

〈光源氏〉は夜遅くに〈空蟬〉の家から帰りました。その後、〈光源氏〉から手紙が送られてくることもありません。

[27・ウ]

【翻字本文】

ても、えやむまじければ、「さりぬべきおりをみて
たいめんすべくたばかれ」と、の給ふ。おさなごゝろに「いか
ならんおりにか」と、まちみたるに、きのかみ国に
くだり、女どちのどやかなる、夕やみのたど／＼しげ
なるに、我車にみてたてまつる人、見ぬかたより引
いれて、おろし奉り、ひがしの妻戸にたゝせ奉りて、
我は南のかうしたゝきて入ぬ。ひるより、きのかみが
いもうとのにし御かた、わたらせ給ひて、碁をうた
せ給ふと、いふ。源はずだれのはぎまに入て、西ぎま

に見とをし給へば、も屋の中ばしらにそばめる
人や心かくるとめとゞめ給へば、こきあやのひとへ

【現代語訳】

それでも、〈光源氏〉は〈空蝉〉のことを諦めることができないので、〈小君〉に「適当な時を見て、〈空蝉〉と会えるようにしてください」と、頼みます。〈小君〉は子ども心に「どのような時に〈光源氏〉と〈空蝉〉を会わせようか」と、じっと機会を待っていると、〈紀伊守〉が紀の国（領地）に出掛けて、女同士でのんびりとくつろいでいる、夕闇のぼんやりとした頃に、

〈小君〉は自分の車に乗せて連れた人（〈光源氏〉）を、誰にも見えない所から車ごと引き入れて、（〈光源氏〉を）車から降ろします。（〈光源氏〉を）東側の妻戸に立たせて、自分は、南側の格子を叩いて部屋に入りました。昼から、〈紀伊守〉の妹である〈軒端萩〉が、〈空蝉〉のもとへやってきて、囲碁の相手をしていると、いうことだそうです。〈光源氏〉が、簾の隙間に入って、西の方向に部屋の中を見通すと、母屋の中柱によりかかっている女性が心にとめた人であると注目して見ると、〈空蝉〉は、濃い色の綾織物の夏用の薄い着物を何枚か

[28・オ]

【翻字本文】

がさね、何にかあらん、うへにきて、かしらつきほそ
やかにちいさし。いまひとりひがしむきにて、残る
ところなくみゆ。しろきうすものゝひとへがさね、
ふたあひのこうちき、くれなゐのこしひきゆへる
きはまでみえたり。つぶ／＼とこえて、まみ口つき
あひぎやうつき（ひママ）はなやか也。碁うちはてゝけち
さすわたり、「そこはぢにこそあらめ。此わたりのこうを
こそ」などいへど、「いで此たびはまけにけり。」をよびをかゞ
めて「十、はた、みそ、よそ」などかぞふるさま、いよのゆの
ゆげたもたど／＼しかるまじう見ゆ。

【現代語訳】

重ね、何か、その上に着ていて、頭の格好はほっそりとして小さいです。もう一人は東向きに座っていたので、残るところがなく（すべて）見えます。（〈軒端萩〉は）白い夏用の薄い生地を着物を何枚かに、紫色系統の上着を（着ていますが、その胸元が開いているので）、袴の紐の

あたりまで（素肌が）見えています。ふっくらと肥っていて、目もと口もとが魅力的で美しいです。（〈空蟬〉と〈軒端萩〉が）囲碁を打ち終わって駄目を詰めるあたり、（〈空蟬〉が）「その部分は勝負がついているでしょう。こちらの部分の決着こそ（つけるべきです）。」などと言いますが、（〈軒端萩〉が）「さあ、今回は負けてしまいました。」（と言って）小指を曲げて「十、二十、三十、四十」などと（目数を）数える様子は、伊予の湯（道後温泉）の湯桁をも数えることができそうで、品性に欠けて見えます。

[28・ウ]

〈絵1〉 夕暮れ時、〈〈紀伊守〉〉の家で、〈〈光源氏〉〉と〈〈小君〉〉が、碁を打つ〈〈空蟬〉〉と〈〈軒端萩〉〉を覗き見ている場面。

[29・オ]

【翻字本文】

小君、源のおはせし所へきて、「れいならぬ人侍て、ちかうもえより侍らず」と、いふ。御かうしはさして、しづまりぬ。「さらば、入てたばかれ」と、の給ふ。あねの心たはむ所なくまめだちたれば、いひあはせんかたなくて、「いかにしていれ奉らん」と、思ふ也。〔割・源詞〕
「いもうともこなたにあるが、我に見せよ」と、のたまふ。
「いかでか、さは侍らん。かうしに几丁そへて侍」と、きこゆ。人みなねて、火かげほのかなるに、いれ奉る。「いかにぞ」と、つゝましけれど、みちびくまゝに帳のかたびらひきあげて入給へど、人はみなしづまりたり。女は、几帳のすきかげ、御けはひしるければ、あさましくて、

【現代語訳】

〈小君〉は、〈光源氏〉のいる所へ来て、「いつもいない人（〈軒端萩〉）がいて、近くに寄ることができません」と、言います。格子は閉じて、家は静まりました。「それならば、（先に）入って（私が入れるよう）工夫してくれ」と、〈光源氏〉は頼みます。姉（〈空蟬〉）の心は曲がることなく真面目であるので、親しく相談するような方法もなくて、「どのようにして（〈光源氏〉を）部屋に入れようか」と、（〈小君〉は）思っています。

〔割・〈光源氏〉の詞です〕

（〈光源氏〉は）「ここにいる妹も、私に見せなさい」と、言います。

(〈小君〉は)「どうして、そのようにできましょう。格子に几帳を添えます」と、答えま
す。

人々は皆寝て、灯火の光がぼんやりとしている時に、(〈光源氏〉を部屋に) 入れます。「(今
入っても) 大丈夫であろうか」と、(〈光源氏〉は) 気が引けますが、(〈小君〉が) 案内す
るとおりに (〈光源氏〉は) 几帳の布を引き上げて部屋に入りますが、人々は皆寝静まっ
ています。女 (〈空蟬〉) は、几帳にすける (〈光源氏〉の) 姿、気配がはっきりとしているの
で、驚いて、

[29・ウ]

【翻字本文】

すゞしのひとへをきて、すべり出にけり。源は、たゞ
ひとりふしたるを、心やすくより給へるに、ありし
けはひよりも、もの／＼しければ、あやしくやうか
はりて、あさましく心やましけれど、人たがへと見え
むもおこがまし。女〔傍・女＝むすめ〕も、めざめてあきれたるけしき
なり。「我ともしらせじ」と、おぼせど、後にかゝる事ぞ
と、おもひめぐらさんも、彼つらき人のためとおぼし
て、「たび／＼のかたゝがへに事つけ給し」などいひなし
給ふ。このむすめ、なま心なく、わかやかなるけはひも
あはれにて、なさけ／＼しく契りをかせ給て、彼
ぬぎすべしたるうす衣をとりて、出給ぬ。小君を

【現代語訳】

真夏用の着物だけを着て、(寝床から) 抜け出しました。(〈光源氏〉は、ただ
一人だけ横になっているので、安心して近寄りますと、以前の
様子よりも、(体つきが) りっぱなので、不審に様子が
変わっていて、(〈光源氏〉は) 情けなくおもしろくありませんが、人違いをしたと気づか
れて

しまうのも情けないことです。女 (〈軒端萩〉) [傍・女と書いてむすめと読みます] も、
目をさまして驚いている様子です。「私とは知らせないでおこう」と、(〈光源氏〉は) 思
います。しかし (〈軒端萩〉が) 後になってなぜこのような事にと、(〈光源氏〉と〈空蟬〉の
関係を) あれこれ考えるであろうことも、あの薄情な人 (〈空蟬〉) のために (避けよう)
と思い、「折々の方違えにかこつけたのです」などとそれらしく言います。

この娘 (〈軒端萩〉) は、中途半端に風流ぶる心もなく、若々しい様子も
可愛らしいので、いかにも情愛深く約束を交わして、(〈光源氏〉は) あの

(〈空蟬〉が) すべらせるように脱いだ薄い生地のを手に取って、(部屋から) 出ました。

(〈光源氏〉が) 〈小君〉を

[30・オ]

【翻字本文】

おこして、戸をあけさせたるに、老たる女のごゑにて
「たそ」と、ゝふ。小君「まろぞ」と、いらふ。月くまなくさし
出て、人かげみえければ、「また、おはする人はたそ」と、
とふ。「民部のおもとなり」と、つねにたけだちのたかく
て、わらはるゝ人あるをいふ也。からうじて小君と車
に乗給て、二条院におはしぬ。〔割・二条院は源の御母の御跡也〕
しばしうちやすみ給へど、ねられ給はず。〔割・源〕

うつせみの 身をかへてける 木のもとに
なを人がらの なつかしきかな

と、かき給ふを、小君ふところに入てもたり。「彼
むすめもいかにおもふらん」と、いとおしけれど、御こと

【現代語訳】

起こして、戸を開けさせた所に、年老いた女の声で、
「誰」と、尋ねます。〈小君〉が「私です」と、答えます。月の光が隙間なく差し
出て、人影が見えたので、「もう一人、そこにいる人は誰ですか」と、
尋ねます。(〈小君〉は)「〈民部のおもと〉です」と、いつも背が高く
て、笑われる人のことを言いました。(〈光源氏〉は)かろうじて〈小君〉と車
に乗って、二条院に帰りました。〔二条院は〈光源氏〉の母(〈桐壺更衣〉)のいた家であ
る。〕

(〈光源氏〉は)少しの間休んでいましたが、寝ることができません。〔割・源氏の歌〕

うつせみの 身をかへてける 木のもとに
なを人がらの なつかしきかな

と、書いた手紙を、〈小君〉は懐に入れて持っています。「あの
娘(〈軒端荻〉)もどのように思うだろうか」と、気の毒に思いますが、お手紙

[30・ウ]

【翻字本文】

づけもなし。うつせみの君も、あさからぬ御けしき
を、「ありしながらのわが身ならば」と、しのびがたければ、
うつせみの はにをく露の こがくれて
しのび／＼に ぬるゝ袖かな

[割・是は伊勢が家の集の歌也]

【現代語訳】

も送ることはないのです。〈空蟬〉も、いい加減ではない（〈光源氏〉の）様子を、「昔のままの私であったなら」と、想いを押さえきれずに、（このように歌を詠みました）

うつせみの はにをく露の こがくれて
しのび／＼に ぬるゝ袖かな

[割・これは歌人〈伊勢〉の歌です]